

<ワン・ポイント・レクチャー> “”いのち”を紡ぐコース

第6回：生・死学ことはじめ②：臨床現場に見るさまざまな死・生の際からの学び

わが国の医療界にあって、その治療方針の決定に際しては、「患者・家族の人生観・価値観や人生計画が考慮されねばならない」とされています。ところが、現実には、医師によってその考慮の仕方に天地ほどの差があると言っても決して言い過ぎではないように思います。このことは教育界・福祉界はもとよりどの世界でも言えることではあり、行きつくところは、その専門職の“人格”がどうなのかということになるのかもしれませんが。

とは言え、自分自身のこと、自分の命・生きざまのことですので、このように専門職に責任を押し付けるのではなく、まずは患者・家族自体が専門職“崇め”（「偉い先生にもの申してはいけない」とか「素人の私には難しいことは分からないから、先生にお任せ」「先生の言うことに間違いはないやろう」などといった姿勢）を改めることで、ピンキリのキリの専門職から自分を守ることを心掛けましょう。それは、主体である患者（場合によっては家族）が自らの生活や人生、さらには命について自らが責任をもって考え、判断し・決断をしていくことが、マズローの欲求階層説でいう最上位の“自己実現”に繋がるからです。

これを欠いている本人自身が専門職ですので専門職を馬鹿にしているわけではありませんが、言うまでもなく専門職は“全能者＝神”ではありません。皆さんと同様に欠点や偏りの多い“普通の人間”ですので、常に正しいことを言っている、誤りのない対応をしているとは限りません。しかも、専門職と患者・家族との関係は契約関係（対等な関係）にあるのですから、患者・家族としても遠慮することなく理解、納得できるような分かりやすく要領の良い説明と治療法として考えられる選択肢と選択肢ごとのメリット・デメリットの提示を丁寧にしてくれるように求めましょう。

特に、病気が長期化している方、治療効果を実感出来ない方、さらには人生の最終段階にある方がどのような日々を送るかは、その方の選択に任せることが大切ですので、猶更丁寧な対応を専門職に求めるべきです。ただ、厄介なことにこのような状態にある方の心は、常に揺れ動いていますし、当然のようにこの揺れ動きは家族も同様に抱え続けます。そのため、今後、どのような経過を辿るか、症状がどのように変化するか、どのような治療が考えられるか、それによってどのような効果・副作用が生じる可能性があるかなどについての予測を専門職から知らせてもらいましょう。そして、時間を掛けて考え、腹をくくってください。腹をくくるための秘訣は、もし、身寄りが居られないのであれば看護師などの専門職と、また、家族のおられる方は家族と十分に時間を掛けて話し合うことが大切です。そのことは、“自分なり”の人生の終焉を迎える上で必要不可欠なことですし、ひいては残された家族の“悲嘆”を軽減させ、立ち直りを促すことにもつながります。言い換えると、そのような相談・話し合いが出来るような関係を日ごろから作っておくことが、やはり最も大切なことだと言えます。